

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
発行(毎月一回・十五日発行)

(通第三四四号)

次
63.8.28

法然上人の常の仰せ	近角常觀	(3)	(1)
利他真実の信心	田村実造	(8)	
歎異鈔のすすめ(二)	榎原徳草	(13)	
一一道会の記	木村無相	(18)	
念佛詩抄	花田正夫	(21)	
「我が善き親友なり」			

慈

光

第三十卷

第一号

法然上人の常持語

上人のたまわく。

口伝なくして淨土の法門を見るは、往生の得分を見うしなうなり。その故は、極樂の往生は、上は天親龍樹をすすめ、下は末世の凡夫、十惡逆の罪人まですすめ給えり。しかるをわが身は最下の凡夫にて、善人をすすめたまえる文を見て、卑下の心をおこして、往生を不定におもいて順次の往生を得ざるなり。しかれば善人をすすめ給える所をは善人の分と見、悪人を勧め給える所をばわが分と見て得分にするなり。かくの如くみさだめぬれば、決定往生の信心かたまりて、本願に乗じて順次の往生をとぐるなり。

又云。法爾の道理ということあり。ほのおは空にのぼり、水はくだりさまに流る。菓子の中に、すき物あり、あまき物あり。これみな法爾の道理なり。

阿弥陀仏の本願は、名号をもて罪惡の衆生を導びかんとちかい給うたれば、ただ一向に念佛だに申せば、仏の来迎は法爾の道理にてうたがいなし。

又云。いけらば念佛の功つもり、死なば淨土へまいりなん。とてもかくてもこの身には思いわずらう事ぞなきといふれば、死生共にわざらいなし。

我はこれ鳥帽子もきざる男なり。十惡の法然房、愚痴の法然房が、念佛して往生せんと云うなり。

或人、上人の申させ給うお念佛は、念々ごとに仏のお心にかない候らんなど申しけるを、いかなればと上人かえし

問われければ、智者にておわしませば、名号の功德をもくわしくしろしめし、本願の様をも明らかにお心得あるゆえにと申しけるとき。

汝、本願を信する事まだかりけり。弥陀如來の本願の名号は、木こり草かり、菜つみ水くむたぐいこときの者の、内外ともにかけて、一文不通なるが称うれば、必ずうまとと信して、眞實にねがいて、常に念佛申すを最上の機とす。もし智慧をもちて生死をはなるべくば、源空いかでかかの聖道門を捨てて、この淨土門におもむくべきや。

聖道門の修行は、智慧をきわめて生死をはなれ、淨土門の修行は、愚痴にかえりて極樂にうまるとするとしてぞ仰

又云。近來の行人、觀法をなす事なれ。仏像を觀ずとも、運慶、康慶が造りたる仏程だにも、觀じあらわすべからず。極樂の莊嚴を觀ずとも、桜梅、桃李の花果ほども、觀じあらわさんこと難かるべし。

ただ、彼仏今現在世成仏、當知本誓重願不虛、衆生稱念佛を唱うべし。名号を唱うれば三心おのずから具足するなり。

又云。仏告阿難、汝好持是語、持是語者、即是持無量寿仏名、といえり。

名号をきくとも信せずば、きかざるがごとし。たとい信すとも唱えずば、信ぜざるがごとし。ただ常に念佛すべきなり。

せられける。

又、人々後世の事申しけるついでに、往生は魚食せぬものこそそれという人あり。或は魚食するものこそそれという人あり、とかく論じけるを、上人さき給いて、

魚をくうもの往生せんには、鶴せんずる。魚くわぬものせんには、猿せんずる。くうにもよらず、くわぬにもよらず、ただ念佛申すもの往生はするとぞ、源空はしりたると仰せられける。

故上人の常の言に云。我は鳥帽子もきぬ法然房也。黒白をも知らぬ童子の如く、是非も知らぬ無智の者なり。ただ念佛往生を仰いで信す。釈迦は念佛して往生せよとすすめ、弥陀は念佛せよと仰せられたり。この一事を信じて余事を知らず。

上人の常の仰せには、源空は智徳をもて人を化する、な

お不足なり。法性寺の空阿弥陀仏は愚痴なれども、念佛の大先達として、あまねく化導ひろし、我もし人身をうけば大愚痴の身となり、念佛勤行の人たらんとぞ仰せられける

利他真実の信

心

近角常観

我等は不清淨である、不眞実である。しかして如來は清淨である、眞実である。さて最も肝要なことは、我等の不清淨、不眞実と如來の清淨眞実との関係である。

世上においても彼人は眞実なりといふときは、単にその人が虚言を云わぬ、不実を為さぬといふだけの意味と考えやすい。されど絶対の眞実といふことは、不眞実なる人に對して、飽くまでその不実を捨てずして、かえつて不実を憐れむがゆえに、如何に不実なるものも、終にはその不実を慚愧して、眞実となるまで、眞実で向つて下さる人を名づけて眞實なる人といふのである。

不実不淨なる衆生を飽くまで見捨てたまわざる、如來の清淨眞実に腹ふくれて、如何な不実な我等もついにはあやまりはてるまでお見捨て下さらぬ御眞実が、即ち如來の眞実である。このよき眞実に出遭うたときは如何なる不実なるものも、疑えるものも、またへだて心を持ったものも、偽れるものも、飽くまで疑うて下さらぬゆえ、何處までもおへだて下さらぬため、遂に疑うことも出来ず、隔て

ることも出来ず、信ぜざるを得ず、眞実ならざるを得ざるようになるのである。これが即ち利他眞実の信心である。言いかえると、我等の不眞実と、如來の眞実と出違いにならぬように頂かねばならぬ。たとえば私が某甲なる友人に對して不実なる考え方を持つてゐる、不信な行動をなしつつある、へだて心を抱いてゐる。しかるにその友人は、すこぶる單純な人である、氣の固らぬ人である、私の不実に氣もつかぬのである、しかし眞面目に我を信じ、我に対して実意をもつてゐるとする。これではたしかに私の不眞実と友人の眞実とは出違いになつてゐる。何となれば、友人は私の不実なのを知らずに眞実をつくしてゐるのである。私は友人の眞実を知りながらなお不実を続けつつあるのである。友人の眞実と私の不実との間が全く無交渉である。

故にもし眞実な友人も、私の不実を知ると、あきれはててその眞実も続かぬかも知れぬのである。もしその眞美を続けてくれたところで、私の不実の申証がないのである。

故に結局横看になつて、如何に不実でも見捨ててくれぬものと安心するか、如何に眞実してくれても、私の不実が済まぬと気がねをするか、二者その一に居らねばならぬのである。

然るに如來の清淨眞実は出違ひの眞実ではない。私の不清淨、不眞実を知らぬ眞実ではない、第一に私の不清淨、不眞実を知り抜いて下さるのである。そして普通ならば不清淨、不眞実なるものに対し、あきれはてて見捨てるがあたりまえなのに、如來は私の不清淨、不眞実なことが特に悲憐すべきものと思し召して、その不実のものが見捨てられぬと踏みとどまつて下されたのが即ち超世の悲願である、絶対の慈悲である、大悲大願と云われる点がこれである。信卷の至心釈が全くこれである。これが何時も繰り返す点である。ここを歎異抄に「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたことなれば」とあるが、即ちこれである。「煩惱具足の凡夫はいづれの行にても生死をはなることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたもう本意、ひとえに悪人成仏のためなれば」とあるも即ちこれである。

人生問題においてもこの点が實に方向転換の枢軸である、相対界の人生において我等が善を為せばよい、惡をしてはいかぬ。又人に対しても疑わねば先方も疑わぬ、隔てはいかぬ。又人に対しても疑わねば先方も疑わぬ、隔

てねば先方も隔てぬのである。それなのにそのなすべき善が出来ぬ、してならぬ惡がやまらぬ、疑いをやめたいと思うが止まず、隔て心を取り去りたいと思うが、取り去ることが出来ぬ。これ実に、二河白道の譬喻に、行くも死せん、止まるも死せん、返るもまた死せん、一として死をまぬかれずといふ心相である。

つまり、疑わねばよい、隔てねはよい、信すればよい、たのめばよい、されど、信することが出来ぬ、たのむことが出来ぬといふことになるのである。このよき場合に、唯一言である、その信ぜられぬももつともである、疑うも無理はないことであると、相対界の五分五分で行き詰つているところを憐愍して下さつて、初めて五分五分以上の大悲を起して下されたのが、そもそも超世無上の本願である所以である。諸仏の助けられぬ者をたすけんとの弘誓である、難度海を度するといふも、無明の闇を破るといふも實にこれである。

私なども人生問題において、五分五分の世の中に、こちらから疑わねばよい、隔てねばよい、争わねばよいとは思えども、如何にせん、疑いも、隔ても、争いも止めることが出来ぬ。その点を知られて、普通なら、それではいかぬといふべきを、私の性分を十分に御承知して下さるものゆえ、如何にもやめることが出来ぬのがもつともである、そ

れが可愛想であると、無理からぬことと察して下さるのである。そこで疑う私をあくまで疑わず、隔てる私にあくまで隔てず、争う私に飽くまで譲って下さるのである。しかもあくまでも貪欲な私に、飽かしめるまで譲りあたえて下さる大悲であるから、如何に貪欲の極りのない私も如来の無貪、清浄の御心に負けてしもうたのである。如何なる悪逆の我等もあやまりはてて大満足するのである。和讃に、「功德の宝海みぢみちて、煩惱の浊水へだてなし」とあるがこれである。又「功德の宝海みぢみちて、煩惱の浊水へだてなし」とあるがこれである。更に「ひとび光照かむるもの、業垢をのぞき解脱を得」とあるがこれである。また、「過去、現在、未来三世の業障一時につみきえて」とあるがこれである。

聖人が、横超断回流を釈して、「断というは、往相の一心を発起すれば、生として受くべき生なく、趣として更に到るべき趣なし、すでに六趣回生の因亡し、果滅す、故に即ち頓に三有生死を断絶す、故に断というなり」と仰せられたがこれである。私が常に言うように、疑心がなくなり、隔て心がなくなるというのがこれである。

ここに大いに注意せねばならぬ点がある。疑いのやまぬのが可愛想じや、信ぜられぬがもつともじや、不実な点があるがこれである。利他廻向とか、利他真実の信心とかいうお言葉が一入あたり難い、特に利他といふお言葉が實に意味深長である。昔から利他、利他の深義といふことで色々解釈をして、その深義の深義たる点を味わおうとしてきたが、一向に深義といふ味があらわれていないのである。私共の不実の点を憐んで飽くまで疑うて下さらぬのである。隔てて下さらぬのである、疑いのとれるまで、隔てのなくなるまで仏の方から疑うて下さらぬ、隔てて下さらぬ、見捨てて下さらぬ、憐みて下さる、恵んで下さるのである。即ち仏より飽くまで私を利して下さるのである、不実の私を見捨てぬ真実を加えて下さるのである、これを利他といふ御言葉でなければあらわれぬ。利他といふお言葉は衆生から仏に向うた言葉である。されど利他といふお言葉はあくまで見捨てて下

見捨てられぬと聞いたとき、嗚呼ありがたいと一念感泣するのである。何んとなれば、今まで隔てを止めねばならぬ、是非よくせねばならぬと思うていたのに、その行き詰っている点を察して下されたもの故、たしかに方向転換をしたのである、しかしややもすると、隔てのやまぬのが可愛想であると承つただけで、いつまでも隔てがやまぬままおり、疑いが止まぬのである、という時は、所謂、疑いながらの往生という様なことを言い出すようになるのである。我等五分五分の人間が、疑いや隔てのやまぬは可愛想じやと憐みたまう以上は、その疑う私を疑わず、隔てるとを飽くまで隔てずに向うて下さるのである。そこで如何な疑い深い私も疑いが去り、隔て心の多い私も隔て心がなくなるのである、そこで疑い晴れて一心一向に後生たすけたまえたのむということがあらわれてくるのである。

「仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」とか、「他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」とか、「これにつけてこそいよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じそらえ」とか、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、

さらぬ仏力をあらわす御言葉が利他である。しかも廻向といふ御言葉がありがたい、私共の疑いのやまぬ点、隔て心のやまぬ点を察して下されて、それを可愛想と思召して、その隔て心のやむまで御身から隔てたまわぬ御心を向けたまうのである。聖人が至心に、廻向利益他的真実心なり、これを至心と名づくと仰せられたのがこれである。

我等が不実が可愛想なりと思召して、それを見捨てられぬ御真実により、如何なる不実な私も頭が下つて大満足するまでお見捨てのない御真実である。聖人の釈に「如來の至心をもつて諸有（あらゆる）の一切煩惱惡業邪智の群生海に廻施したまえり、即ちこれ利他の真心をあらわす、故に疑蓋まじうることなし」とある。疑蓋まじうるなしとするのは如何にも疑いも隔てもなくなった心持である。特に蓋の字の左訓に煩惱とある、疑いも煩惱もなくなつて、如何にも満足圓滿の心持である。ついにこのようになるまで如來より疑わず、隔てなくして下さるのである。「まさしく如來、菩薩の行を行じ給いし時、三業の所修乃至一念一刹那も疑蓋まじわることなきによりてなり。この心は如來の大悲心なる故に、必ず報土正定の因となる」と仰せられたがこれである。故にまた「如來、苦惱の群生海を悲憫したまいて無碍廣大の淨信をもつて、諸有海に廻施したま

えり、これを利他真実の信心と名づく」と仰せられた。如何にも利他真実の信心というお言葉がありがたい。即ち不実なる我等を見捨てられぬというご真実を、私の上にあくまで加えて下さるために、遂にその御真実に満足して疑もやみ、隔てもとられ、御慈悲を信ぜざるを得ぬようになつたのが即ち利他真実の信心である。

和讃に曰く、

尽十方の無碍光仏 一心に帰命するをこそ 天親論主のみことには 願作仏心とのべたまう

願作仏の心はこれ 度衆生のこころなり

度衆生の心はこれ 利他真実の信心なり

また曰く、

正依第(257) 浄土の大菩提心は 願作仏心をすすめしむ

すなわち願作仏心を 度衆生心となづけたり

度衆生心といふことは 弥陀智願の廻向なり

廻向の信樂うるひとは 大般涅槃をさとるなり

と。願作仏心とは如來の、設我得佛と願いたまえる本願である、度衆生心といふことは、若不生者不取正覺と誓いたまえる大悲である。その如來の願作仏心、度衆生心のまゝが、我等に届いて下されたのが、即ち利他真実の信心である、弥陀廻向の信樂である。

我等に信仰の力が俗諦門の上に実現してくるのは、この

如來の真実心の発現である。この点では實に不可稱不可說不可思議の力があらわれて下さるのである。現生十種の益も、現世利益和讃の数々も實にこれである。されど一つ忘れてならぬことがある、これは如來の御真実のあらわれである、その御真実は私の不実を憐みて下さる御真実であるから、自分が真実になつたように考へてはならぬ。

如來の御真実といふのは、私の不実を見捨てられぬといふご真実であるから、その御真実をいただく私共は、徹頭徹尾不実の私であることを忘れてはならぬ。ここを歎異抄の九章に、何時までも煩惱のやまぬにて、いよいよ御真美をいただけよ、との御教化である。また御文に「無始已来つくりとつくる惡業煩惱を、願力不思議をもって消滅するいわ。あるがゆえ」とあるのもこれである。

この身のあらん限りは不実の私である、煩惱の私である、されどその不実の根を切りて下さったのである、煩惱の樹を伐りて下されたのである。しかし肉身のあるかぎり、人生の水に活きている間は、煩惱熾盛の花盛りである、煩惱興盛の青葉若葉は繁りつつあるので、實に慚愧のいたりである。

歎異鈔のすすめ

(二)

田 村 実 造

二、真信の告白（第二條）

歎異抄をはじめから順に解説するというわけではありませんが、第一條はこの書の總括にも當るものだと思います。これを冒頭にもつてきましたところに著者唯円のなみなみでない考證があるように思われます。自分の経験からしても初心者がいきなりこの第一条ととりくんでも、容易に理解できないでしようから、やはり第二条から読んでゆくようおすすめします。

さてはじめに、第二条の本文を少し長いが引用しておきましょう。ただし本文は原文のままにして、仮名づかいだけ今様（いまよう）にしておきました。

おのおの十余カ国境をこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたもうおんころざし、ひとえに往生極楽のみちを、といきかんがためなり。しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をも知りたるらんと、こころにくくおぼしめして、おわしまし

して地獄におちてそらわばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もそらわめ。いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞなし。
弥陀の本願まことにおわしまば、眾尊の説教虚言なべからず。仏説まことにおわしまば、善導の御釈虛

言したもうべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞がもうすむね、またもて、むなしかるべからずそぞうろうか。せんするところ、愚身が信心におきてはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面面の御はからいなりと、云々。

ここに引用した本文を読んでもらえば判るように、この第二条は「おののおの十余カ国の境をこえて、……往生の要よくよきかるべきなり」までの前文と、「親鸞におきては、ただ念仏して……せんするところ愚身の信心におきてはかくのごとし」までの後文との二段にわけてみるのが判りやすいでしょう。

要するに第二条は、かつて親鸞が関東に在住中、その教をきいて念仏に帰依（きえ）した念仏集団のうちに、親鸞が関東を去ると、正統派と異端派との対立がおこり、そこで信仰に迷いを生じた人びとは親鸞の真信を聞くため、遠い関東から十余カ国をいとわず上洛してきたが、その人びとを前にして、親鸞自身の入信のいきさつを卒直に告白したもので、いわば、この第二条の後文こそは、信仰を求める人びと、あるいは信心に迷いをおこした人びとに對する示談（じだん）の最初の模範例、しかもそれは親鸞聖人

みずからによる示談のきわめつき、極意だと思います。
わたくしの尊敬する池山栄吉先生は、「ただ念仏して云々」を「信の告白としての要諦（かなめ）」だとか「最後の切り札」だとかいっておられます。先生のいつの講話にも、またどの一文にも、ここに出ない場合はあります。この第三条は、歎異抄の初めをかざるものであるとともに、終りをしめくくるものである、ともいえるであります。

そこで話を第一段の前文にうつしますが、これを読んで、親鸞はなぜ最初の布教の地を遠い関東に求めたのか、という疑問をおこす人がいるだらうと思います。わたくしもそうでした。それに答えるためには、まず第二条の歴史的背景ともいえる親鸞の生い立ちから法然上人による入信、さらに越後の國への流説（るたく）などについて知つておく必要があります。

親鸞の生い立ちから入信まで 親鸞の家系は藤原氏から出て、京都郊外の日野に領地をもっていたので日野姓を名のった。いまに知られる日野の法界寺は日野氏の菩提寺にあたります。父は日野有範（ありのり）といい皇太后宮に仕えたが、親鸞はこの有範の息として承安三年（一一七三）に生まれ、九才の春出家し範宴といった。出家すると仏教の根本道場であった比叡山にのぼり、爾來二十年にわ

地獄は一定（いちじょう）すみかぞかし」の絶望感に苦しみ果てついに六角堂を抜け出して吉水の草庵に走ったのでした。「地獄は一定すみかぞかし」とは、その刹那の彼の心境をふりかえっての、いつわらない告白だと思います。

「いすれの行もおよびがたき身」に苦しみもだえていたればこそ、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」との法然上人の示談が、彼としては、そのままなおに信じられて法悦にひたることが出来たのです。それは、よくいわれる「闇から光」というよりも「闇がそのまま光に転じる」、「地獄がそのまま救いに転じた」心境だと思います。親鸞は法然上人の念仏をとおして善導—釈尊—弥陀の本願に直入したのでした。

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言

なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御

釈、虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもって、むなしかるべからずそぞうろうか。

とは、その逆をいったものであります。こうして叡山での二十年間の聖道門自力の修行によつてではなく、法然の他力念仏によつて救われた親鸞は、比叡山をはなれてのち、足かけ七年間法然門下にあつて他力の念仏にはげんでいたつて修学、修行にはげんだのでしたが、どうしても悟りをえることが出来ず、行き詰った彼は、ついに下山して京都市中の六角堂にこもり、もっぱら本尊の救世観音を祈念したのでした。二十九才の時であつたといわれます。

この六角堂参籠中に聖道自力の教えから他力念仏の教えに廻心したのであります。伝えられるところでは、六角堂での百日参籠中の九十五日目に聖徳太子の夢告によつて、当時吉水（よしみず、今日の知恩院のあたり）に専修念仏の道場を開いていた法然のもとに参じて他力念仏に帰依したのでありました。さきにも引用しましたが、第二条の後文に、

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと（法然）の仰せをこうむりて、信するほかに別の子細なきなり。云々、

とみえるのは、まさしく彼の信一念の瞬間を告白したものがなです。親鸞は六角堂の参籠中、それまで叡山での二十年間——実際は一人前の分別ができるようになつた十五・六才ないし十七・八才ごろから二十九才までの約十四・五年間ないしは十一・二年間とみるべきでしようが——のあらゆる修学・修行によつても救われなかつたわが身の絶望感に、身も世もなくもだえていたことでしょう。その窮屈、彼は「いざれの行もおよびがたき身なれば、とても

いますが、そのころ熊谷直實も同じく法然のもとで念佛を専修していたようです。

法難——越後国への流謫、ところが七年目に法然教団に對して一大法難がおこりました。それは旧仏教教団の比叡山や奈良の興福寺などからのねたみによる非難でした。法然教団が聖道門から見すてられていた庶民階級に多くの男女の信徒をえたばかりでなく、九条兼実をはじめとする公卿（くけ）や貴族あるいは熊谷直実や北条政子のようない時新興の武士階級にも熱烈な信者ができて侮（あなど）りがたい勢力を形成するにつれ、一二〇四（元久元）年——親鸞入信後四年目——叡山の衆徒は、決起集会を開いて、法然教団に対し念佛停止を要求したのでした。法然教団はただちにこれに対して、七カ条の制戒をもって非難に答えるとともに、自戒につとめたため、非難はひとまずおさまったが、しかし翌年になると、今度は奈良の興福寺が専修念佛の禁止を朝廷に訴えた。そのうちにまたまた不祥事が突発して、ついにこれが教団の命とりになつたのです。といふのは、後鳥羽上皇が熊野神社へ参詣のため行幸した留守中に、上皇の寵愛をうけていた松虫・鈴虫らの女性が鹿ヶ谷（京都の東山山麓）の念佛法会に参加して外泊したことが露見して上皇の激怒を買ひ、法然教団の専修念佛者に大弾圧が加えられることになった。死罪四名と法然、親鸞

ら八名は慣例によって俗人にかえらされた上、流罪といいう厳しいものであった。

（法然は土佐国、親鸞は越後国、他の六名はそれぞれ、備後国、伯耆国、伊豆国、左渡国、などであった）

越後から関東へ 越後国府（いまの直江津）に流謫された親鸞は、五年後の一二一（建暦元）年に赦免されたが、彼はなお三年間——都合七年間——を越後にとどまり、四十二才のとき越後から関東の常陸国（茨城県）に移つた。その事情は明らかでないが、常陸国に移住してから、かれは布教活動をはじめることになった。以後二十年間、関東において念佛の布教に従つたが、その布教にあたつて、いくたびか一身の危険にさらされたことが伝えられており、それはかれの文字どおり不惜身命の伝道をかたるものであります。

十余カ国の境をこえてきた人びとは、こうして関東で親鸞から直接念佛の教えをうけた同行たちであり、第二条の表現の切実さからすれば、河和田の唯円房もきっとこれら同行の一人であつて、このとき聖人からじきじき示談にあずかったのだと思います。でなければ、他人からの伝聞などでは、一句一言が肺腑をつらぬくような親鸞の直訛をとてもこのようない文章にできるものではあります。わけても最後の一句、

せんずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし
このうえは、念佛をとりて信じたてまつらんとも、また
すてんとも、面面の御はからいなり
のごときは、著者唯円の耳底深くのこつていた親鸞のこ
とばであつたのだろうと思ひます。

以上、第二条についてその歴史的背景をまじえながら解説してきました。みなさんは、これで親鸞聖人が自力の修学・修行から他力念佛へ帰入された経過がひととおりわかつたことでしょう。しかし、それはあくまで一応の知識にすぎません。これだけでは、第一条にあるような「念佛申さん」と思ひ立つ心」も、「その念佛」も口から出ないでしょ。この第三条は他力念佛の求道者には絶対の導入であり、手引でありますから、これをただ目読するだけでなく、くりかえし心読してもらいたい。絶対他力の信には絶対という以上、他力・自力の差別はないはずです。絶対他力とは回向する助陀のがわからるもの、または信にめざめたのちに、はじめて絶対他力の廻向であったのかと気づくもので（求めるがわからいえば、絶対自力で求める）ことです。また他力の信をうるには善知識、じぶんで「得心のいく善知識」が必要です。聖人の淨土和讃にも、善知識に会うことは難しいとあります。それは法然上人にめぐり会う

ゲエテの言葉

天才の仕事に反対する者は燃えている石炭をたたくよ
なものだ、消すどころか、火花が八方に散つて、飛んでも
ないところから燃えはじめる。

鐘の響はいかめしいが、また人懐かしげに大氣の中で振動するように、云い現わされた眞実も、それに魂が添うて四方に伝播して何処かで共鳴を起すならそれで沢山だ



一 道 会 の 記

榊 原 德 草

昭和五十二年十月三十日午後一時、今年の一一道会が催された。今年は池山先生御往生から第四十回目の追憶会で、先生の名号碑建立が二十七回忌に当る昭和三十九年であったが、いつのまにか私も七十七歳となって四十回忌の一一道会に遭うことができた。

覚如上人の報恩講式の中に「哀れなる哉、恩顔は寂滅の煙に化したまゝと雖も、実語を耳の底にのこす」と仰せられてある。今このお言葉通りに、私は池山先師の御写真を毎朝礼拝し、そして「ただ念佛のみぞまこと」の実語は耳底深くひびいておる。先師の肉体は四十年の彼方に去ったが、実語とお姿は今ここに在る。

さて、法句經の中の「愚について」の章に「たとえ生命のかぎり愚かな者が賢い人のそば近く身を置こうとも、彼はついに真理の法を知るにいたらない、丁度あのスプーンがスーパーの味を知ることがないように」と釈尊の言葉をのこされている。かつて念佛に耳傾けて聞いたが、その実感はいつか消え去り、今日にいたっては、念佛の出ることが

いたぐことにする。

花田先生のお話は次の通りがありました。

命あって今日もお目にかかりました。最近私の胸に去来しておりますことを一つ二つ申上げて御挨拶にかえさせていただきます。

その一つは聖徳太子の「世間虚偽、唯仏是真」の常持語であります。これはご存じの通り天寿國曼陀羅の裏に橘姫が刺繡で記されたのであります。おおやけの場で発表されたものでなしに、いつも御家庭でくりかえして太子が申されたものであります。とかくおおやけに発表すると、どうしても理想的になり、綺麗になりますが、家庭での言葉は、ありのまま、飾りのないものであります。

さて、このお言葉に相当するのが歎異抄の総結文にある「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておわします」であります。

ところが親鸞聖人のおいでになった頃は、太子のこのお言葉はまだ一般に知らされなかつたのです。ここに同じ信の世界では、時間をこえ、場所をこえて一味に響くもの、時空をこえた不变の光があります。

聖徳太子の三経義疏に、「經というは常なり、前聖後賢是非すべからず、故に常といふ」と仰言つてゐるのもこれ

一日に何回あるか、かえりみて此のスプーンと同じ私である。かかる暗黒の私に歎異抄第九章は、はかりがたき大悲の御声として拝され身に滲みてくる。

池山先生が、歎異抄第二章は八文字に開いた念佛への正門であり、入口である。第九章は私の念佛はどこへいったかなと、裏門を出してしまわんとする時への呼びかけであると仰言つた。裏門で私の背後から聖人が私の背を軽くたたきながら話しかけ教えて下さるお声がきこえてくる。

午後一時から開会。会衆は約百人近い人々で、遠く北陸や長崎、名古屋、四国、その他まことに先師の還相のお徳風は年を経るにしたがい広く大いなるものである。

私は例年のように仏前に阿弥陀経、ならびに歎異抄第十一章までを拝読したが、「幸いに有縁の知識に依らずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや」のところは胸がつまり声が絶えて続けられない。まことに大きな仏陀の御手廻し一つである。

さて、左に諸先生のお話をなるべく録音通りに記させて

と通じるものであります。

私の胸に最近どうしてこれがしきりに去来するかと申すと、ハイジャックの問題が続きましたことによります。ドイツはこの問題に、律法的な厳罰主義で対処しました。民主主義をまもつて人命を第二にしてきびしく処してきました。これに対し日本は妥協的無抵抗主義で、人道主義をまもつて妥協的に処してきました。これに対し、赤軍派の人達は独善的暴力主義で、自分達の考えに反する者は殺害してしまうといった態度であります。

さて、これについて世界中が色々に批判して、ドイツ式に賛成し日本は甘いと非難し、或は日本式な妥協で人命が救われた、あれもやむなしと見る人もあります。しかし、その国の長い歴史と伝統と国民性によつてなされたもので、それをあれこれ云うのではありませんが、よく考えます時、律法主義でも、無抵抗主義でも、独断主義でも、そこに光はありません。このような三つの態度で終始したのでは「世間虚偽なり」いずれも人の世に光明をもたらしえないぞと太子に教えられるのであります。

重複して申しますが、ドイツ式で行けば結局は強いものが勝ち、力をもつておさえる、その極端になるとヒットラー的な行き詰りになります。妥協的無抵抗主義も限度があり、やがてそこに破局があり、更に相手の悪を助長する結

果にもなります。又赤軍派の独善主義の非は申すまでもありません。この三つの態度が虚偽であり、闇であります。では「唯仏是真」とは何か。仏の相対をこえた絶対な智慧の光にあう時、私共が持ち合せの智慧がその光力を奪われて、そらごとたわごと、まことあることなしと知られ、今まで誇った智慧も善行も、はすかしき限りとなり、また自分の愚悪に卑屈になっていた身もそれを憐んで下さる大悲にその垢を洗われて愚悪が気にからなくなるのです。

このことは、法藏菩薩が世自在王仏の前に立たれて、歎仏偈をのべられた最初に、

光顕巍々として威神極りなくまします。

かくの如きの焰明与に等しきものなし、

日・月・摩尼・珠光の焰耀も、

皆ことごとく隠蔽してなおし聚墨のごとし。

とありますが、日の光とは智慧、月の光とは慈悲、摩尼宝珠の光とは功德の光りでありましよう、そうした持ち合せの一切の光が皆おおいからくされて、聚墨、墨のかたまりのようになってしまった、とのことであります。これは王仏の絶対の智光に法藏自体の虚偽さが照らし出されたのであります。

又釈尊の求道の象徴とされる善財童子の求道物語がその

このように仏智は私共の虚偽さをすべて照らし出して下さると共に、その虚偽の故に何處にも光のないこと、苦のはてしないことを弥陀仏は飽くまでも悲憫されて、虚偽を転じて眞実にかえなして下さる、転悪成善して下さるのであります。これあって太子自身に、いばらの道がひらけたのであります。

さて御存じのように太子は日本最初の女帝推古天皇に呼ばれて二十歳の時太子となられました。当時の日本は文化はおくれ、朝鮮との動乱は続き、そのうえ閥族の蘇我馬子が横暴を極めている。こういう時、太子は日本をどう処してよいのか、はたと行き詰られました。幸に二十二歳の時朝鮮から慧慈・慧僧の二人の高僧を迎えて、どうすべきかでなしに、どうしてよいか分らぬ御自身の眼を問題とされて法華・勝鬘・維摩の三經を学び、三十歳前後に心眼が開かれました。

まず、御父用明天皇の大法要をせられ、次ぎに人材登用の道を冠位十二階に定め、更に國の行くべき道を十七憲法に掲げられました。外は隨・唐に留学生を送って、日本の黎明期がはじまりました。然し太子の御理想をすすめる上に蘇我氏の横暴は非常な妨げとなりました。馬子は伯父君の崇峻天皇を害した仇であります、それと共に政治を執られる太子の御心中如何ばかりでしようか。かと云つて相手

通りであります。仏の絶対智の権化者の文殊菩薩の教をうけて善財は「私は愚痴に覆われ、懶慢の垣をめぐらし、愛染の川で堀を造つており、悪趣の門を出入りしております。自分の主人は煩惱で、煩惱の奴隸となつております。この憐れな私を、文殊菩薩様どうぞお導き下さい云々」、これが善財童子の求道物語の最初の懺悔であります。これで仏の絶対智に照らされて、童子が、愚痴、懶慢のすつかり駄目な姿が写し出されています。これから善財の求道、五十三の知識をたずねての旅が始まるのであります。

善導大師は、仏智に照らされて、自身は現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流転して、出離の縁あることなき身と告白しておられるのであります。

ひとえに善導大師に依られた法然上人は、愚痴の法然、十惡の法然房といつも仰言つており、親鸞聖人はまた、煩惱具足のわれらはいずれの行にても生死をはなることあることなき身と慚愧されて、内は愚にして外は賢こぶる、愚禿といつも名告られております。

近角先生はこの有様をおたとえになつて、今まで自分をダイヤモンドのよう思つてゐたが、それがお照らしをうけてガラスの偽玉だったとわかり、自分の惡を猛虎のように怖しがつてゐたのが、張り子の虎であつたとしつれ、そこに怖れることもいらなくなるようと仰言つてゐる、

を殺したのでは、怨みはうらみを呼んではてしがなく、放任すれば我慢はつるばかりであります。そういう中にあつて太子は「共に是れ凡夫のみ」と、それを感化する力もない自分もまた凡夫であると省みられて「三宝によりまづらば何をもつてか枉（まが）れるを直うせん」と篤く三宝に帰依され、そこに御自身も光明を頂き、相手も仏力におさめられることを確信されたのであります。虚偽なる凡愚を悲愍される仏の絶対のまことを「唯仏是真」と渴仰せられたのであります。二条に「人はなはだ惡しきものはすくなし、よく教うれば從う」とありますように、如何なる悪人も、仏のおまことを妨げうる人はないとの仰せは、何と力強いお言葉であります。

しかし、太子はそこに救いを見出されましたが、馬子の横暴は続き、太子はそのたびに深くお苦しみになり、時に夢殿に幾日もおこもりになつて、ようやく政治を執られるという時もありました。その根本の解決が「唯仏是真」の一匁にあつたので、御家庭でひとりごとのように常に繰り返されたのであります。

歎異抄に「如來の御恩ということをば沙汰なくして、我も人もよしあしとのみ申しあえり」とあります。現在の世界がその通りで、しかもわれよし、かれあしの争いが続いております。それにつけても、太子の「篤敬三宝」

の御教が私共の心に厳しく響いてくるのであります。同時に親鸞聖人が「ただ念佛のみぞまことにておわします」と、仏心が耳から入り、口にあらわれて下さる、名号、みなのさけび、見えやすく、たもちやすいことばをえらんと下さった仏意をすぐにお伝え下さるのであります。聖人が「ただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべし」と聞きとられ「ただ念佛のみぞまことにておわします」と信証して下さるのであります。

私自身が、煩惱の始末がつくのであれば問題はありませんが、盤珪禪師が仰言るように、血を血で洗うのでは清らかになりません。このどうしてみようのない煩惱具足の凡夫に、そのことをかねて御見抜き下さったみほけが、わが名を呼べと、言葉になつて頗られて下さるのであります。煩惱に智目は覆われ、罪業に行足は縛られた身には、ここまでおいで道はついて行けませんが、ここまで来て下さる大悲のお念佛に救われるばかりであります。

それでは、その有様はと申せば、「天命を知つて人事を尽す」という道が開けてくるのであります。世上には「人事を尽して天命を待つ」と申しますが、これは一つの理想で、翼を失った小鳥が大空を憧れてどんなに走つても地からはなれることは出来ません、自分自身に省みて、人事を尽したなどと云えることは一つもありません、無数の愚痴

がそこに続きます。それに反して、仏心のままことにおさめられて、「天命を知つて人事を尽くす」道がひらけます。例えば、不治の病人を抱えた医師が、治らぬと知りながらも、今日只今になすべきことを尽す事であります。最近の科学の進歩はいちじるしく新発見しても、ほどなく新説が出て陳腐してしまいますが、それを知つて研究をやめるのでなく、それを知りながら落着いて今日なすべきことをやるゆとりが出来るのであります。そこに無理のない自然の道が開けるのであります。

くどいようですが、くりかえして申しますと、世間に善いとか悪いとか、是とか非とか色々な満巻きがありますが、太陽が出るとローソクも洋灯も電灯も要りません、そのように、仏陀の絶対の智慧光をうけて、自分の智慧を誇ったことが大きな己惚れであった、善事をしていたと思つていたことも虚偽であったと知らされて、そのまま大悲の光明の広海にうかばせて頂き、そこに感謝と共に慚愧の人事を尽くす」という無碍の道が恵まれるのであります。よく交通事故をおこす若い運転手に、親の写真を車内で持たせたら事故がほとんどなくなつたと、或病院長から聞いたことがあるが、如來の御恩を忘れてよしあしのみにかかりはてることを強くかえりみさせられたのでここで加えておきます。

念佛詩抄

木村無相

おそろしいこと

和上おおせに

〃如來さまのお聞かせを

ほかにして

オノが聞かせて いるほど

おそろしいことはない

オノが聞かせる

話はせぬよう

入信談はついつい

そなり勝ち——

親鸞聖人さま

『正信偈さま』に

〃邪見惰慢惡衆生
信樂受持甚以難——』

なつてはならぬ

和上おおせに

〃無明の大夜(たいや)

無明長夜(ちょうや)の

まつただ中で

すこしワケがわかれれば
はや光明放つような
気になって

オノが聞かせて いるほど

おそろしいことはない

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

オノが聞かせて いるほど

おそろしいことはない

オノが聞かせる

話はせぬよう

入信談はついつい

そなり勝ち——

親鸞聖人さま

『正信偈さま』に

〃邪見惰慢惡衆生
信樂受持甚以難——』

空中を飛び人を下に見る
神通力を得たようになつてはならぬ——

ああ 大心海 大心海——

わかつたといふは
わかつたにあらず

どこまでいっても

わからぬ身ぞと

知らせたもうが

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ああ 大心海

和上おおせに

“狐狸（こり）も

蛇蝎（じやかつ）も

すべて受けこむ大心海

なでてさらえて

受けとる大心海

とらえた狐つきを
そのタイミングで
まもって帰る——

迷い子案じて

親がむかえに来て

手を取り家路に
まもって帰る——

攝取信心

信心攝取

攝取はなれて

お助けなし

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

こんな爺々を

和上おおせに

“こんないやらしい

爺々（じじい）を
かわゆうて



攝取

和上おおせに

“信心攝取の次第を知つて
攝取信心の次第を知らず

タイマツを持って

狐つきをさがす

かわゆうて

ならぬそくな

助けとうて

ならぬそくな——

そのお心が

あふれあふれての

今のナムアミダブツ

こんな爺々を

助けとうて

ならんと言うて

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

狐狸も蛇蝎も
このわたし

受けこみたもう大心海
ナムアミダブツの大心海

“名号不思議の海水は
逆説の屍骸もとどまらず

衆惡の万川帰しぬれば
功德のうしおに一味なり”

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

「我が善き親友なり」

花田正夫

「旅は道すれ、世はなき」¹というが、人の世にあってよい友に恵まれることは、明るく眼やかよろこびをあたえられる。その友にも種々ある、竹馬の友、趣味の友、同窓の友、同郷の友等々であるが、転変する世に、力に限りのある身としては変わぬ友情を持ち続けることは不可能である。

先年、五十年前の同窓の友の訪問をうけたが、お互に名告ると、五十年前の友の姿は心に浮かぶが、現に対面している友と結びつかない。竜宮城から帰った浦島太郎はそこに誰一人知人も見つからず、玉手箱を開くと自分は白髪の老爺であったというが、私共は歳月に障えられてたとえ街で顔を合わせても、それは完全なよそ人になってしまうのである。

こうした人生にあって、変わぬ友情を保つことは全く不可能なのであらうか。しばらく人ととの交渉について省みよう。

私共が何かの縁で会うと、最初から色々と心が動く。好しまず。有名な娘道成寺の話に、道成寺うるこが肌の脱ぎしまい、と云う風に、自分を嫌う安珍を追うて、美しい清姫が蛇体となつて火を吹きかけるとある。但し私共はここで、相手が逃げるから蛇の心になつたので、自分は本来おとなしい人間だ、と自分の責任を相手に負わし勝である。

ここは深く反省せねばならぬことで、もし蛇の心、瞋恚の煩惱さえなければどんな縁にあっても蛇や焰が出るはずがない。そこに自分の責任が明らかになると、今度は相手の欠点ではなく、眼が内に向けられて、自分の悪心をどう始末したらよいかが問題となる。

ところが、泥人形はどんなに洗つても泥ばかり、瓦をどんなに磨いても玉にならないように、煩惱具足の身としてその始末のつけようもないことに行き詰るのである。それならそれをあきらめられるかというに、これも至難である。どうにもならぬがどうにかしなければならぬ、というジレマンに落ち、浮かぶ瀬がなくなるのである。

色々苦心はしてみるものの、自分に始末がつかぬとなると、親しい師友や親兄弟に力を借りようとする。そこで慰めと励ましを受けるものの、あれも一時、これも一時で、問題が復雑になり深刻になると、遂にはそれらも何の力にならず、破滅の憂き目にあわねばならぬ。

きとか嫌いとか、善いとか悪いとか思うと、その心が相手に語らないでも通じる。然し「夜目、遠目、傘の内」というように遠くで、ぼんやりと見ているとあまり欠点も見えないが、接近して毎日くらすようになると、不完全な人間同志のこととて段々と欠点が見えてくる。

私が岡山時代に、仏教済世軍をおこされた真田増丸師に或学生が非常に感激して、是非先生と行動を共にさせて下さいと申出た時「富士山も遠くで見ると美しいが、近寄つて見よ石ころばかりだ。君は何に感心したのか知らぬがわしも瓦礫ばかりだ!」とことわられたことが忘れられぬ。

こうなつた時、一体どうすればよいのか。もし自分が相手の欠点を知つて、それをよく理解し、その人の足らぬことを補うて行くことが出来れば問題はないが、はたしてそれでやり通せるだらうか。人間の親切心には限度がある、昔から、可愛さあまつて、憎くさ百倍といふ、遂には、自分で自分の心の始末がつかなくなつて、段々とへだての壁は厚くなり、同じ家に起居しながらも、よそびとなつて

この時、或種の人々は人間以上の力にすがろうと神仏に祈願をこめる。然し自分が勝手に救つて下さると思つた神仏が、はたして本当の神仏であるか、それは人間の欲望でつくりあげた、自分にだけ都合のよい神仏を拝んでいるのではないだらうか。

稻葉内成師のお話に「明治神宮に沢山の人がお参りするときいて感心したが、よく聞くと勝負師が多い、それも明治天皇は負けたことがないので、勝たして下さいと祈願していると知らされて、阿然とした」とある。入学試験が深刻になると天神様参りが多く、最近は老人の間にポックリさんの大流行である。これらは皆勝手な願いをかなえて下さるものときめて祈る例であるが、それを誰が引受けてくれるのであらうか

以上によつて、自分で自分の煩惱の始末もつかず、罪業の重さにあえぎながら、人に同情を求める、或は勝手な神仏を想像してそこにたのんで見るもののそれは一時の気休めに終り、荒野の闇に行きまどう旅人同様に、はてしない流れがその定めである。

身から出た鏑で、訴えようのない苦惱に沈んで、孤独の旅を続ける身に、囁きかけて下さる声があつた。それが私

にとつて親鸞聖人であった。

「さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべしとこそ聖人は仰せそらういし」

(歎異抄十三条)

この一句は、私自身四方八方の闇の中で、内なる煩惱の鬼があれ狂うてやまぬ中に、フト心に浮かんだ聖人のお言葉であった。「内に八万四千の煩惱をのこらず眞足した親鸞は、それ相応の業縁にふれると、どんな業さらしの振舞をするか知れたものではない。あんなことは決してしないとか、こんなことは断じて言わないなどと云えたものは一つもないんだよ」と、私と同座して下さって、慈悲あるる心で呼びかけて下さるお心にふれた。

そこに業苦に沈む身に、同座し、同心して下さる聖人こそ、私が業縁によってはどんな業さらしをしようとも、世間のすべてから捨てられ、呆れられる身も、聖人だけはおへだてなく御一語して下さる方だと大きくうなづくと共に、闇の心に光がさしてきたのである。

私はここに、独生独死、独去獨來の身に、同心の真実の知己を恵まれたのである。四国の大八十八ヶ所の巡礼さんが、同行二人と書いた傘をもって旅しているが、私はもう二度とはぐれることのない伴侶を得たのである。

なることのある云々」

の御声がひびいて、愛憎にゆらめきながらもそこにゆとりを恵まれるのである。

次に、生死の苦海のはてしのないにつけ、何時まで経つても、何処に行つても碍りの多い身に

「念佛者は、無碍の一道なり……罪惡も業報も感ずることあたわず云々」

碍りある身に、さえられぬ仏光を頂き、その頼もしさに幾山河を越えさせて頂くのである。生き杖を念佛に恵まれるのである。

なお、仏恩をよろこべず、淨土よりもこの世に執着する煩惱興盛の身に

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこころにてありけり」

と同心して下さりながら、他力の悲願は、これをかねてしろしめして、ことに憐れんで下さるぞと手をひいて下さるのである。

更に、たまではあるが仏恩が身にしみて、念佛も申されるにつけては

「一人居てよろこばば、二人と思うべし、二人居てよろこばば三人と思うべし、その一人は親鸞なり」

と、寄り添うて下さるのである。

ここで聖人の時にふれて語りかけて下さる事例をあげよう。私が医大に入った春、父が亡くなつたが、その時、病をよくすることも出来ず、死を前に苦しむ父を慰める術もなくなつて、苦しさのあまり病室から逃げ出した時、

「今生にいかにいとおしふびんとおもうとも存知のことくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛もうすのみぞすえとおりたる大慈悲心にてそらうべきと云々」

の聖人の涙にふれて、念佛にかえり、行きつまつた心の底が抜けて、最後まで看護させて貰えたことがある。

次に、親の死ぬが死ぬまで、冬はありがたく、夏は邪魔にする火鉢同様のあつかいしか出来ぬ、飽くことのない利己の心を悲しむ身に

「親鸞は、父母の孝養のためとて、一遍にても念佛もうしたることいまだそらわず云々」

更に、離合因縁の道理を無視して、愛する者との別れをかなしみ、憎む者との同居をきらうて、愛憎と共に苦悩する身に

「つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、は最後に、聖人の常持語

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思し召し立ちける本願のかたじけなさよ」

は、私共の煩惱の一切をよく理解して下さって、その煩惱のうごめくところ、いつでも、何処でも、何をしていようとも、そこにこの慈語があらわれて下さるのである。

釈尊は、

他力の信をえんひとを うやまいおおきに喜べば
すなわち我が親友ぞと 教主世尊はのべたもう

と、聖人が仰言るように、他力の信の光をうけて、御恩をとうとびよろこぶ人を、「我が親しき友」と寄り添うて下さると讚仰していられる。

受けがたい人身をうけ、如来聖人にかしずかれて淨土へ導かれて行く事は、何という幸慶であろうか。それなのにいたずらにこちらからおへだて申し、善き親友となつて下さることも知らずに空しくすごすことは勿体ない限りである。

あとがき

名古屋は二月が一番寒いので、身がひきしまる思いが致します。この月は大聖祝月であり、例年のように釈尊と太子の徳光を日講で讚仰いたしました。昨年の一道会でも太子の常持語と、尊敬三宝とお勧め下さいるお心の一端を申上げましたが、改めてその恩徳を謝しまつることであります。

又、一月には法然上人の御忌月でありましたので、上人の常の仰せを抄出させて頂きました。凡夫往生の大道は、還報本願のを念佛にありと、一切人の救いの門を開扉して下さったこと、そこに私共への心の岩戸開きがあり、光がさしそめたのであります。

近角先生の仰せは、くりかえしてお読み頂きたいことであります。私共の相対五分五分の心では、右か左かどちらかに偏向してしまいますが、そういう間違いづめの私共にそがれる大悲の御心、如來利他的救いをお述べ下さいました。間違わぬようになつて来いでもなく、間違うまでよいでもなく、このように間違いづめの私をかねてしろしめしてことに憐み給う大悲を頂く

ばかりであります。

田村さんの「歎異抄のすすめ」はいかにも懇切に信の旅の手引きして頂きました。次号にも続けて頂きます。私共の信の友に

鹿児島の第七高校出身の人々、田村、川畑、城、東、西元、白井等多くあります。ついで、島津公が念仏禁止をせられ、きびしい弾圧がありましたが、やがて明治になり、解禁されるに及んで、内の爆発的な求

道心と外からさしのべられた手によって、美事な開花があつたことを憶念させられます。ゲエテの「ホーマー」を殺し得ても、彼の詩は人々の心から心に伝えられて消すこととは出来ぬ」と云つたことも慰い併せられ

- 每月二十四日、午前午後。
市バス、新郊通り一丁目下車。
東入る三筋目左入る。
- 每月第一、二、三日曜、午後一時半、
地下鉄、新瑞橋下車。近鉄呼続下車。
又は本笠寺下車、市バス乗りつけ。
市バス、新郊通り下車。
- 每月七日午后、(日曜には変更)
尾西市三条板倉、蓮光寺修道会。
新一宮よりバス、西三条下車。

△御案内△

(一月一日は休講)
毎月第一、二、三日曜、午後一時半、
一道会例会。

市バス、新郊通り下車。

地下鉄、新瑞橋下車。

近鉄呼続下車。

又は本笠寺下車、市バス乗りつけ。

市バス、新郊通り下車。

定価　半年　七〇〇円(送共)

一年

一四〇〇円(送共)

木村さんは、入院以来小康状態から、快方に向いはじめたとのことであります。寒

い北陸と、四月の花時頃までは病院で静養して貰いたいと念しております。

榊原さんは例年ながら一道会の記を、

テーブから克明に筆写して下さいました。

年々に有縁の方々が沢山お集い下さって、静かなうちに眞剣な聞音の縁を頂けますうち、榊原さん御一家の御苦勞のなみなみならんことを謝しております。

印 刷 人	坂 部 光 雄
編 集 発 行 人	花 田 正 夫
電 話	八二一局七〇三七番
名 古 屋 市 南 区 町 二 ノ 八 八	
愛 知 県 西 加 茂 郡 三 好 町 大 字 福 谷	
名 古 屋 市 南 区 町 二 ノ 八 八	
郵 便 番 号 四 五 七	
振 諸 口 座	名 古 屋
行 所	慈 光 社
郵 便 番 号 四 五 七	